

小城市立 小中一貫校 芦刈観瀾校 学校だより 26【10月号③】

ともに



平成29年10月13日発行 《文責》 校長:濱崎 豊治 副校長:北村征一郎

研鑽を重ね、足腰の強い「校内研究」へ！

「校内研究」とは、どのようなものでしょう？。校内研究とは、学校において、児童生徒の教育のために、教職員が共同で行う研究のことです。児童生徒の実態を正しく捉え、これをより望ましい方向に変えるにはどうすればよいかを研究の中心でなければなりません。そして、研究の成果は、児童生徒の変容の姿で立証されます。このように校内研究は実践上の課題から出発し、日々の実践によって実証され、研究の成果は日々の教育活動に生かされてこそ意味があります。すなわち、校内研究は児童生徒を中心に据え、日々の実践にしっかりと根を下ろした取組でなければならないということです。



もし、児童生徒の実態に教職員が問題意識をあまり感じていないような場合があるとすれば、自校の児童生徒の「よさ」と「問題」を明らかにし、整理するところから始める必要があります。そして、教職員が共有する学校課題に対し、計画・実践・反省・アクションのサイクルによって学校改善を進めていくことで、学校としての教育活動のつながりやまとまりが生まれ、学校の組織的教育力が高まっていきます。このように校内研究によって、個々の教職員や一部の教職員の力量に頼る取組から、共有する課題の解決に向けて全ての教職員が協働する組織的な取組へと変容させ、「学びの共同体」としての学校風土を築いていくことが求められています。

また、教職員が研究に努めなければならないことは、法律によって規定されています。「教育基本法」(教員)第9条
法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。

「教育公務員特例法」(研修)第21条

教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない。

余談ですが、欧米の研究者によって取り組まれた研究に「効果的な学校」の研究があります。社会的に不利な環境に置かれた児童生徒にとって、学校は大した効力を持ち得ないという見方に疑問をもって取り組まれた研究でした。不利な環境条件にあるにもかかわらず、児童生徒の学力水準が中流階層の児童生徒と同程度の学力を保障できている学校に注意を向け、そのような学校を「効果的な学校」と捉えて、なぜそう成り得ているかを追求しました。その結果、「効果的な学校」には、ほぼ共通して次のような特徴があることがわかりました。

- (1) 児童生徒が学習に取り組みやすくする学校の風土がある。
- (2) まずは、基礎的な知識や技能をしっかりと教えることを学校全体として重視している。
- (3) すべての児童生徒の学力達成に対して、教職員集団が高い関心と期待を抱いている。
- (4) 児童生徒の学力達成度の状況を把握・診断し、指導の目標を明確化している。
- (5) 強力で計画的に教授・学習活動に関与している確かなリーダーが存在している。

そして、さらに明らかになったことは「学校内部の組織的な努力・要因により、児童生徒の学習の質に違いが生じる」というものでした。我々教職員は謙虚に受け止め、肝に銘じるべき知見だと思います。

観瀾校では11日(水)に校内研究として、3年1組で羽白先生と貞松先生のTTによる算数の研究授業を小中の全職員が参加して実施しました。東部教育事務所の高柳指導主事を講師として御招きした事後の研究協議では、提案授業をもとにして、授業づくりについて検討し合い、高め合いました。今年度も観瀾校では、授業者が各研究部会で検討し計画した研究授業に全職員が取り組みます。また、グループでの授業研究会も実施、予定されており、今年度も「共に学び、共に考え、共に創る」志の高い観瀾校の研究となるよう努力していきたいと思っております。

今年の観瀾校の校内研究は、これまでの取組実績を基盤に、児童生徒の実態(課題)や新学習指導要領への移行・実施を踏まえ、以下のテーマで3年計画1年次の取組をスタートしました。義務教育9ヵ年間の見据えた日々の授業づくりを通して、全員で研鑽を重ね合い、子どもと教職員が「ともにのびる」確かな積み上げのある足腰の強い取組となるよう、今年も研究推進委員会、各教科グループ等のチームワークでがんばります。12月15日(金)は、小城市教育委員会指定「小中一貫教育」の研究発表会を開催します。



芦刈観瀾校 研究テーマ

「主体的・対話的で深い学びを実現し、生きる力を育む小中一貫教育」

～「書く活動」を効果的に取り入れた授業づくりを通して～